

患者の心に処方箋を

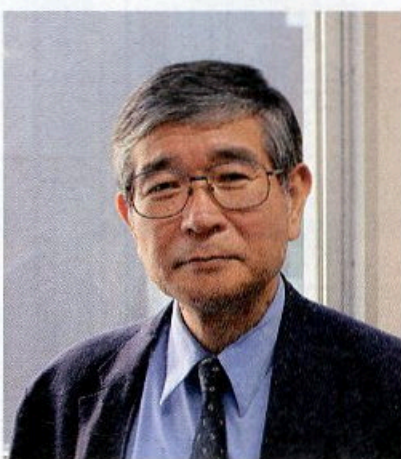
「がん哲学外来」 樋野興夫さん

ひのおきお

深い悩みを抱えがちながん患者には心のケアが必要とされているが、医療の現場では、症状や治療の説明で手が回らないのが現状だ。そんな中、順天堂大学医学部教授の樋野興夫さん（病理・腫瘍学）が個人面談形式の「がん哲学外来」を始め、患者と医療従事者の対話を重視したこの試みは、患者だけでなく多様な立場の人が出会い、語り合う「がん哲学外来カフェ」として街の中でも行われ、注目を集めている。

「がん哲学」は、キリスト者の樋野さんの造語で、病理学者による専門の「がん学」と、内村鑑三などの「キリスト者の思想」を組み合わせたもの。

患者の心のケアに対応できていない医療従事者と患者の間の「隙間」を埋めたいと、樋野さんは2008年、



樋野興夫さん

都内の順天堂大学医学部付属病院に「がん哲学外来」を開いた。まず、30分〜1時間、患者との個人面談でゆつくり傾聴。その後、対話の中で「ことばの処方箋」を出していく。

「核になる言葉」で、患者に内面的な気づきを促すのです。私には、若き日に読んだ中から『病氣であったも病気ではない』など、

「相手に寄り添える人なら誰が開いてもいい」。参加者は、みな性格も体験もニーズも違いため、対応の良し

「核になる言葉」がある。がん医療に必要な

「相手に寄り添える人なら誰が開いてもいい」。参加者は、みな性格も体験もニーズも違いため、対応の良し

「相手に寄り添える人なら誰が開いてもいい」。参加者は、みな性格も体験もニーズも違いため、対応の良し

「相手に寄り添える人なら誰が開いてもいい」。参加者は、みな性格も体験もニーズも違いため、対応の良し

「相手に寄り添える人なら誰が開いてもいい」。参加者は、みな性格も体験もニーズも違いため、対応の良し

きるかについて、患者自身が抱えている真の希望や欲求に気付かせよう。つまり、患者が神によって「導かれた瞬間」にたどりつくこととも言えます」（樋野さん）

さらに、集いやすい「街なか」で始まったのが、「がん哲学外来カフェ」（以下、「カフェ」）。現在、登録されている「カフェ」は90以上あるが、開くために必要な資格やマニユアルは無い。会場も病院、教会、文化施設などさまざま。6月には福岡・大名町教会でも始まった（6月12日付既報）。

「相手に寄り添える人なら誰が開いてもいい」。参加者は、みな性格も体験もニーズも違いため、対応の良し

患しを客観的に評価することはできないが、「カフェ」で交わされた「ことば」で多くの人が立ち直る姿を見てきたと樋野さんは言う。

「意味のある出会い」

都内のお茶の水クリ



お茶の水クリスチャンセンターで月一度開かれている「がん哲学外来カフェ」

スチャンセンターで、月に一度開く「カフェ」には、毎回70人ほどが集う。6月には、がん

「断酒会」を17年続け

「今日の（気付きの）ためだった」と感じたという女性は、この日

「必要なのは、空っぽの器を用意すること。私たちはすぐ、水を入れない」と

「がん哲学外来」は13年、一般社団法人になった。樋野さんが今、目指しているのは、過疎化が進む地方などで、病を抱えている人が生きやすい、医療の共同体「メディアカル・ビレッジ」をつくること。

「必要なのは、空っぽの器を用意すること。私たちはすぐ、水を入れない」と「話さない」と思っ